

自由討論

高澤紀恵（司会）：いま北原さんが社会史において、フランスをはじめ同時代の歴史学の一つの潮流としての社会史というものと、それから二宮さんが名付けた一つのはみ出し続けていく歴史学のあり方を呼ぶ「希望としての社会史」というものを分節化されたと思うんですね。そのことを踏まえた上で、長谷川さんの報告と成田さんの報告とはどちらも大きく戦後の日本の史学史というものをとらえて、その上で社会史の位置づけ、行い、かつそこと二宮史学との関係をどう読んでいくか、大きくいえばそういう構えのご報告だったと思うのですが、しかし最後に成田さんがご指摘になったように、そのとらえ方においては、あるズレがあるだろうと思うんですね。ですからいま北原さんが整理して下さったようなその「二つの社会史」というこの概念装置を使って、成田さんからの問いかけに対してまず長谷川さんから少し応答をお願いするというあたりから議論をはじめてみてはいかがでしょうか。よろしくお願いいたします。

長谷川貴彦：成田さんと私の、社会史といいますか、現代歴史学の理解について若干の差異があるということですが、それは北原さんの非常な明快な整理を用いることでクリアに整理できたのではないかと思います。常にはみ出していく歴史学、自己革新の運動を続ける歴史学に付された記号としてとらえるならば、歴史学そのものが社会史という状況にあるのではないかと思います。やはりこの社会史と名付けられたものと、21世紀初頭現在の歴史学の実践のあり方というものが若干乖離している。やはりそこでは、二宮さんの定義をこえて、別な名称というものが必要になってくる。そこで冒頭で述べたさまざまな転回を経た後の21世紀初頭の歴史学のことを、私の場合は現代歴史学と呼んだわけです。

高澤：この点に関して成田さんはいかがですか。この問題についての理解についてだけでなく、社会史と現代歴史学の関係についての話にもなるかと思えますけれども。

成田龍一：少し高澤さんが言われたことの前提から議論しようかと思います。長谷川さんの報告と僕の報告とを史学史というふうに言われていたのですが、それは歴史学の時間的な変化という意味での史学史であるように思います。一方で岸本さんの報告もこれは見事な史学史であって、それはどの点に歴史学の特徴を見出すか、という点においてこれも史学史であったと思うのです。で、長谷川さんと僕の報告のやり方がとても似ているということがあって、似ているから差異が出てきてしまったわけです。北原さんの言われたように二宮さんは社会史を記号というふうにとらえられているわけですが、もう少し別の言い方をすると、戦後におけるいろいろな地域、これは国といってもあまりズレはないと思うのですが、戦後における各国の歴史学のフランスにおける一形態としての社会史を二宮さんは当面想定して考えられていて、フランスでの手法というものを学び紹介しながら、それを日本における戦後歴史学のあり方にぶつける、というようなやり方をとっているように思うのです。つまり戦後における歴史学のあり様の中に何をみるのかということと、またそれをみるがゆえにどれだけの距離をとるのかということになる。そうした時に有効な時間的な射程はどこまであるのかという問題にもう一つなってくる。その時に長谷川さんは、現在においては近代的歴史学との社会史的な距離の取り方はすでに有効性を失っているから、あらたに文化史と名付けるべきだと言われた。一方二宮さんの場合には、むしろそれを包摂したかたちで現代と戦後の歴史学との距離のほうを重視しているように思うんですね。僕自身は、具体的にいえば近現代の日本史研究を念頭におきながら発想していくということになるのですけれども、二宮流の言い方に賛同しているというのが現状です。と言いますのも、民衆史研究というものがある時期社会史研究を肩代わりしている時期があって、それと自立したかたちで社会史研究というものが近現代日本史の場合には出てきている。お互い別個なものとして名付けてもいいのかもしれないけれども、言

ってみれば社会史研究Ⅰ・Ⅱ（前期社会史研究、後期社会史研究）というかたちでむしろその共通性をみた方が、非常に縛りの強い近現代日本史研究における戦後歴史学パラダイムからするといいいのではないかと。そういう判断です。

高澤：ありがとうございます。いまの成田さんのお話は大きくいえばどこに切断面をおくかという議論でもあろうかと思うのですが、先ほど北原さんのコメントの中で、社会史の問題と、もう一つ 68 年の経験というものをどういうふうに受け止めていたのか、これは権力の問題もそうですし、代表性の問題もそうですし、68 年の大きさというところに非常に大きな切断面が二宮史学の中にあるのではないかというご指摘だと思いますし、成田さんの図柄に関しても同じような理解ですよ。そうしますと長谷川さんのおっしゃる「社会史から現代歴史学への転換」においてはいかなるものを転換として据えるのでしょうか。

長谷川：20 世紀の歴史学を牽引してきたのがアナー学派であるということは、多くの方が認めるところかと思いますが、ピーター・バーグは、アナー学派の隆盛も 20 世紀後半にはやや薄らいだ感があると述べています。そのような中で昨今は非常に理論的な志向の強い歴史学が、アメリカなど英米圏の歴史学が、注目を浴びつつある。アメリカでは「フレンチ・セオリー」ということばがよく用いられますが、デリダやフーコーといったもともとはフランスの土壌で開花した知的な潮流を輸入品としてアメリカに持ちこんで、それを理論的な一つの基盤として「言語論的転回」や、「カルチュラル・ターン」や、「文化論的転回」といった、独自の歴史学がアメリカでは展開されてきた。そのアメリカの歴史学が徐々にわれわれの射程に入ってきたのが 90 年代から 2000 年代、たとえば日本史の領域でいえばジョン・ダワーの作品がなじみ深いかと思いますが、ああいったカルチュラル・ヒストリーの具体的な作品として日本の歴史を叙述するということは日本史研究にも大きな影響を与えているわけです。ですから 90 年代以降のさまざまな転回を経て歴史学は多極化しているという状況になってきている。つま

り 90 年代以降諸転回を経て現代歴史学に移行しつつあるということが言えるかと思います。おそらく 1945 年とか 1968 年といったような外的な状況がいかに歴史学に介入するかということも一つ重要な契機となるかと思いますが、90 年代のことを踏まえればポスト冷戦であるとか社会主義の崩壊といったことも一つの知的な状況としてあげることができるのではないかと感じます。

成田：少し長谷川さんとの間の問題を詰めておいた方がいいかと思います。一つは日本研究の現状についてですが、日本研究の現状を長谷川さんは 90 年代以降の問題にも視野を及ぼしながら独特の陰影を持っているというかたちで非常に高く評価しているわけですが、そんなに高く評価しているのだろうかというのが多くの現場にいる人間としての感覚です。民衆史研究というのは、鹿野政直さんにしろ安丸良夫さんにしろ、あるいは色川大吉さんに典型ですが、「特殊な日本」が前提となっているわけですね。日本の近代とは特殊な近代であって、その近代化のされ方、あるいは日本の近代を問題にするというのが民衆史研究の問題意識であって、そこにはモダニティという発想はないんですね。モダニティという問題を持ちこんできたのは社会史研究であって、日本の近代というのも、それはつまり近代の中の一つの地域におけるモダニティというものであって、そのところを問題にしなければならない。そうすると、そのことによって近代というものの評価が大きく変わってくるというかたちになります。この問題に関してはもう少し丁寧な言い方をすると、社会史研究が最初に出てきたとき色川さんが最初につまずいて、それ以降色川さんは社会史研究に対して最も厳しい立場をとるわけですが、そのあと鹿野政直さんと安丸良夫さんがそうした形での問題をできるだけ具体的に内在化しながら探っていくということを言うのだけれども、そこでは近代化批判あるいは日本近代問題というかたちになっていた。そこで社会史研究が出てきた時に鹿野さんがその問題を捨てて、安丸さんだけが近代批判という社会史研究をやっていくという、そういうプロセスがある。

まとめれば、日本近代を特殊とする民衆史研究

の崩壊過程が社会史研究とパラレルで出てくるというのが、これが日本史研究のあり方だろうと知っているんですね。ですからそれは、90年問題という言い方もできるけれどもやはり一つは68年問題であり、やはり社会史登場ということの意義をどのように日本近代研究が受け止めたかという、そういうような事柄のプロセスの問題でもあるように思います。

岸本美緒：68年問題について中国史の立場から発言したいのですが、68年問題という場合にフランスや日本のことを考えますけれども、中国でも文化大革命をやっている。二宮先生の著作のなかにもすこし出てくるのですけれども、文革というものは非常にラディカルに権力というものを問うたわけで、現実には政治闘争のあらわれにすぎなかったかもしれないけれども、専門人の持つ権力性を非常にストレートに問題にしました。そういう意味ではすごくラディカルな問題提起をしていたわけです。けど現実には起こったことはそこに生の暴力が生まれてきて、いわゆる騒乱状態になったわけですね。文革が終わった後中国の歴史学はまさに近代歴史学に戻りしただけで、やっぱり実証しなければだめだ、という感じになっていったわけです。それは後戻りなのかもしれないけれども、世界の中にそういう流れがあるということも抑えておく必要があるかなと私は思いました。

高澤：ありがとうございます。もう一点、岸本さんのご報告では「構造概念の構造転換」という大変おもしろい表現を用いて、二宮史学だけではなくさまざまな分野で起こった80年前後の大きな流れが指摘されています。今回はまず二宮宏之との対話ということで彼のテキスト群との対話をしているわけですが、少しそれを広げていきたいということと、またフロアからも二宮さんの言う全体性の問題あるいは構造の問題をどうとらえていくのだろうという質問が出ていますので、少し補足していただけると幸いです。

岸本：構造とは何か、とは難しい問題ですがけれども、北原さんのお話の中で二宮さんは「構造」と

いうことばを徐々に使わなくなって「社会的図柄」ということばを使うようになったとありましたが、これは確かにそうなのだと思います。「構造」ということばは一見したところ確固たる印象を与えるので、もう少しやわらかな表現をしようと思うと別のことばを使いたくなるというのはわかるんですが、ことばを変えればいいのかというそういう問題ではなくて、たとえば現象学的社会学では「日常生活世界の意味的構造」という言い方がありますが、これもある意味では「やわらかな」ことばだと思います。当時の人々がある社会を意味付けている、もちろんその社会の意味付け方はそこにいる人々の中でもいろいろと異なっているのでしょうけれども、ただ人々の中でさまざまな論争ができるということ自体が論争の前提になる意味的構造を共有しているということであって、たとえばエリートとエリートに対しての批判をとりあげるにしても、あの人たちはエリートだという共通認識があるからそこに対立等が起こるわけで、そういう点ではそこに「意味的構造」が存在するわけですね。かつその「意味的構造」はゆるぐもので、事件的なきっかけでそれまであこがれの対象だったものが悪役になったりすることもある。そういう意味では「構造」ということばを使っても「やわらかな」対象を表現することはできると思います。問題は、「日常生活世界の意味的構造」のようなものを客観的に研究することができるのかということだと思います。すなわち当時の人々の共同主観の中で使われていた語彙や人々の動き方を観察することでわれわれが客観的に理解することが可能になるというように思うのか、でもそこには当時の人々が表象するものとわれわれが表象するものという二重の表象があるわけで、その中で構造というものを客観的に議論することができるのか、このあたりについてはいろいろな議論のあるところかなとは思いますが。

それから全体とはどういうことかというご質問があったと思うのですが、日常生活の意味的構造」という考え方から述べますと、当時の人々にとって全体だと思われていたものが全体だ、と言うことができると思うのですよね。それは客観的にみたら全体ではないかもしれないけれども、当時の人々からみた世界観というものがある。い

くら前近代の人だからといってもやはり世界観なしに人は生きていけないわけで、彼らの世界観のようなものをとらえようとする時に全体というものが出てくるんじゃないかなと思います。

高澤：いまお話しくださった内容は、中国史の動向としてお考えでしょうか。

岸本：いえ、中国史に限ったことではないです。

高澤：では、長谷川さんのおっしゃる現代歴史学と、いま岸本さんがお話し下さった内容はどのような関連を持つのでしょうか

長谷川：現在のヨーロッパ・アメリカの歴史学の焦点が主観的なものに収斂しているということは一つの動向として確認できることです。ただ、たとえば「パーソナル・ナラティヴ」という個人の語りを個人のレベルにおり立って歴史を分析していくという動向があらわれてきているわけですが、なかなかこれらの動向を全体性の回路に返していくことはできていないように思われます。しかしもちろんすぐれた歴史実践の中では個人の語りから既存の時代の全体像を覆すような話が出てくるわけで、たとえばリンダ・コリーというイギリスの歴史家がつい最近、イスラム諸国につかまったヨーロッパ人奴隷を対象として帝国主義の歴史研究を行いました。われわれはサイード的な影響で、あたかもヨーロッパが近世以降ずっとイスラムあるいはオリエントに対して優越であったという印象を持ちがちなのですが、そうではなくて、ヨーロッパ人は常にイスラムに捕えられて奴隷になるという「恐怖のメンタリティ」というものを持っていた。ヨーロッパが大航海時代以降優越的な地位にあったのではなくて、近世においてはアジアと非常に対等な地位にある、あるいはある意味でアジアの方が優越的な地位にあったという、最近のグローバリズムにおける見直しと非常に密接に結びつくような個人の語りの分析を行っているわけですね。そういうかたちとしてであれば、全体の図柄のなかに個人の主観性を起点にして全体を描き直すことは可能かなと思います。

成田：岸本さんが出された構造という問題からずいぶん大きな議論になってきているようですけれども、要するに「構造」の対概念として何をもってくるかということが議論の出発点であるわけで、対概念として「主体」という概念を持ってくるのが、戦後歴史学の発想だったと思うのです。そして主体の内面を明らかにするという問題意識をもったものがとりあえず民衆史研究ということができるのではないかと、思います。ですから民衆史研究というのは、できるだけ主体の内面に即していく、ということを描くのですけれども、そこで評価のポイントとなるのは、しかしそうした主体的な営為となるものが絶えず歴史に裏切られる、そういう評価なんです。絶えず挫折する主体の意図、そういう話になってくる。ですから「非情な歴史」を盛んに主張するわけです。その部分では、戦後歴史学と共通の枠組みで、「構造」と「主体」という問題設定がなされているということになると思います。その時に「主体」という問題は、ことばとしては民衆史研究と同じことばになるだろうと思います。「主観」ではなくて共同的な世界観として理解しようとする、その時に共同性、共同的な主観を宙づりにしないで、ある歴史的な位置付けをする、このような発想として岸本さんの述べられた「やわらかな」構造という問題が出てくるように思います。このように考えていくと、コスモロジーという考え方とはどのような関連があるのでしょうか。

岸本：私が述べたのは、間主観的なもの、共有されたものが人間社会である限りおそらくあるだろうということです。その社会に生きている人がみんなそうだとは言いきれないけれども社会の中にはある常識みたいなものがあって、その常識をわれわれが理解できるのかといえちよっとあやしいところがある。ただ、クリフォード・ギアツが、対象社会に生きる人々が考えていること、つまり主体の内面を明らかにできるのかという点と必ずしもそうではないんだけど、当時の人々が口にしている皮肉や冗談が分かるようになる、これが分かるようになることなんだ、というような言い方をされていて、その程度のことなんじゃないかと思います。つまり当時の人々とコミュニケーション

ンができるということであって主観そのものが分かるということではないんだけど、ある程度分かることはあるだろう、ということです。ちょっと質問に答えられていないかもしれませんがね。

高澤：成田さんはなにかございますか。

成田：「歴史の作法」で二宮さんが展開されているのは、いま岸本さんがおっしゃっていたような内在的な理解をする、しかしそれとともにそこから離れるということ、つまり痕跡のそばに付きながら痕跡というもののから離れるということです。どちらか一方の極に振れた時、痕跡に即してそれで終わりにしてしまえばそれはいつてしまえば歴史を実体化するというような話になるし、それから歴史からその痕跡を現在の価値で判断してしまえばそれは歴史に内在していないということになりますよね。そこをどうつなぐか、ということころが二宮さんの「歴史の作法」での問題の出し方であったと思うので、そのところを議論した方がいいように思います。

高澤：それはおそらく北原さんがおっしゃっていたことによれば、認識と記述が常にワンセットになって出てくる、ということだと思えるのですけれども、そのように問題をつなげてもよろしいでしょうか。つまり、歴史を書くというオペレーションの問題ですね。21世紀の初頭に私たちが直面している問題は何か、という問題と、二宮史学の50年の軌跡の中でそれをどういうふうにとらえたのか、という問題の二つに分けて議論した方がよろしいかと思います。今回のシンポジウムについてはこの刊行された五巻本の著作集を参照軸としておくことによって多様な分野で研究している人たちが議論する場が生まれてくるということに意義があると思いますので、そこを土台にしないと議論がぶれてしまうと思います。ですので、「歴史の作法」を一つ柱にして、書く、記述するというオペレーションをどういうふうにとらえていたと考えているのかということを整理した上で、それと、いまだ書き続けている私たちの直面する問題はどこにあるのかという二段構えで議論を進めたいと

思います。成田さんはすでに先ほど整理をさせていただいたと思うのですが、出発点としてもう一度「歴史の作法」の中での書くことについて整理してもらえますでしょうか。

成田：二宮さんは「歴史の作法」の中では、「歴史を問う」という位置付けを現代歴史学の課題として設定した、つまり「歴史へ問う」あるいは「歴史から問う」ということではなくて「歴史を問う」ということですね。「歴史を問う」時に歴史家はそうした問題を認識するとともに、それを書くという作業をするという存在であると規定されたと思います。歴史を認識するとともに、それを書きとめる、書きとめる際に痕跡に付き、痕跡から離れる、そういう作法が必要だ、これが二宮さんの議論のたて方だと思うんですね。

せつかく高澤さんに問題を立てていただいたのですが、少し議論を広げるために、鹿島徹さんの「歴史の作法」と『マルク・ブロックを読む』とはどういう関係にあるのかという問いをとりあげます。おそらくこの問題はそのような問いを出しているだろうと思うんですね。つまり、二宮さんが「歴史の作法」という問題系を出してきた時に歴史家論というかたちで一つの御自身の仕事の領域を設定されたというのはつまり、歴史家の営みというのはいったいどういうものであるかということに即している。そして二宮流のやり方を探ってみると、いままで僕たちが理解していたマルク・ブロックの仕事がまるで逆転してしまうような印象を受ける、あるいは日本の戦後歴史学の中におけるマルク・ブロック受容というものがブロックの営みとはまるで逆の営みから発しているということが明らかになる、そのことによって歴史家の書くという営みが問題化されるという設定ではなかろうかというふうに思います。

高澤：これはですから、鹿島徹さんからの、論文「歴史の作法」の物語論的歴史理解が『マルク・ブロックを読む』の実際の歴史叙述においてどのように具体化されていると理解されますか、という問いへの成田さんからの一つの応答となっているのですけれども、この件について鹿島さんはどうでしょうか。

(鹿島徹氏の質問)

「歴史の作法」と『マルク・ブロックを読む』の関係について伺いたいと思います。

2004 年、「物語」を巡る哲学的議論が膠着状態となり、歴史学界では中村政則氏らが「歴史学の言語論的転回」批判を行って議論の収束を図る動きがみられました。こうしたなか「歴史哲学と歴史学の対話」を提唱し、自らの「物語論的歴史理解」を定式化された論文「歴史の作法」は、画期的にして同時に孤絶したものであったように思います。その方法論的考察を歴史家の評伝という実際の歴史叙述として具体化したものが『マルク・ブロックを読む』であると、二宮さんはある小文で述べていらっしやっています。しかしその「具体化」がどのようになされているのか、その点についてはあくまで読者の読解に委ねられたままにいるように思います。

そこで、具体的な質問です。論文「歴史の作法」の「物語論的歴史理解」が、『マルク・ブロックを読む』に実際の歴史叙述としてどのように具体化されていると理解されていらっしやるのか、またその成果は何であり、その弱点／見直されるべき点は何であるとお考えなのか、それを伺いたいと思います。

鹿島徹: 哲学を研究している者です。2004 年に「歴史の作法」の論文が出たわけですが、その時期を考えてみますと「物語」という問題をめぐって哲学の側ではある種の膠着状態になってしまった。他方で歴史学の側では、2002 年に中村政則さんが『歴史学研究』で「『歴史学の言語論的転回』批判」をお書きになり、同時期の日本史研究会の催しもそのようなものだったと思うのですが、ある種論争の収束を図るかのような動きがみえた。そういうなかで 2004 年に出された「歴史の作法」はまことに画期的かつ孤絶したものであったと思います。「歴史の作法」は「物語論的歴史理解」ということをご自分なりに提起されたもので、しかも岩波の「図書」にお載せになった小文のなかで、『マルク・ブロックを読む』は「歴史の作法」で抽象的に書いたことを具体化したものである」と位置付けていらっしやいます。しかしどういうふうに

二宮さん流の「物語論的歴史理解」が『マルク・ブロックを読む』の中で具体化されているのかは読者に委ねられてしまった課題であるように思います。そのことを今回伺いたいなと思ったわけです。

いろいろな面から「二宮物語論」を論評することはできるのですけれども、一点だけ申し上げます。「『物語る』」ということは経験を伝えることである」とベンヤミンは言っていますけれども、マルク・ブロックという人間の経験を読者に伝えるということを二宮さんはおやりになった。そこで語る際、マルク・ブロックの著作の中から 2004 年の日本の状況を見やりつつ二宮さんが拾い上げてきたものは二点、すなわち歴史学の革新と共和主義の精神、ということでありました。そのようなやり方である時代においてある過去の先人の経験を次の世代の人たちに語り継ぐことを行ったという点で、『マルク・ブロックを読む』はすぐれた物語の実践であろうというように思います。

高澤: ありがとうございます。ではフロアからいただいた問題へと入っていきしたいと思います。佐藤（公彦）さんからいただいた問題で、「絶対王政の統治構造」における絶対主義国家の団体的編成はノルベルト・エリアスの『文明化の過程』における「図柄」の議論とフィットすると思うのですけれども、その観点から評価するとどうなるのでしょうか、というご質問が出ていますけれども、先ほどの議論では、二宮さんが「構造」ということばから徐々にエリアスのいう「図柄」へとことばを変えられたこと、成田さんはそこにある程度積極的な意義を認めていらっしやる。それに対して「構造」といっても 80 年代以降はいろいろな意味での構造があるんじゃないかと岸本さんはおっしゃっています。二宮さんがテキスト群の中で「構造」ということばを使わなくなって「図柄」ということばを使われるようになったことの意味について、もう少し丁寧に考えてみようと思います。二宮史学の転換という意味でもいいでしょうし、もう少し広げて歴史の認識の問題へとつなげてみてもいいかもしれませんが、どのような広がりのある問題だと思われますでしょうか。

(佐藤公彦氏の質問)

西洋史の中で、「絶対王政の統治構造」は画期的な論文で、高橋史学との連続性も見られるとのことですが、この絶対主義国家の社会的編成論はノルベルト・エリアスの『文明化の過程』の論とフィットするとわたしは思うのですが、その方面から光をあてて評価するとどうなるのでしょうか。お答えいただければ幸いです。

岸本：それは二宮さんの統治構造論がノルベルト・エリアスのいう「文明化の過程」とフィットするという意味でとらえていいのでしょうか。つまり図柄か構造かということではなくて、社会構造論としてみた時に似ているものがあるんじゃないかという趣旨なのかなあと思いましたが・・・

佐藤公彦：わたしは西洋史のことをよく知りませんので、お伺いしたいということで質問を出しました。二宮先生の論文の中でもこの論文は大変画期的な論文で、フランス革命論での、団体的編成があらわれてそれが市民的原理に転換していくんだ、という議論の前提を成すかなり画期的な議論だったんですね。質問は、エリアスが封建社会の中から宮廷文化というかたちで絶対権力が出てくる歴史的なプロセスを説明した、その議論を踏まえた上での質問だったんです。つまりある絶対権力が歴史的に成立していく歴史的プロセスの中で、王権が特権として認知していく中間諸団体が連続的に構造化されているということをいままでの絶対主義論は見逃していたのではないかと、という視点で僕なんかはエリアスを読んだんですね。そういう視点だとエリアスと二宮さんの団体的編成論には整合性があるもんですから、そういうように理解していいんだろうか、そういう質問です。

岸本：わたしの感じでは「フランス絶対王政の統治構造」とエリアスの論はかなり違うように感じます。秩序が成り立つプロセスを考えてみると、エリアスの場合では個人が行動様式を変えていくことによって秩序が生まれるわけですね。ただ「フランス絶対王政の統治構造」の場合は、自然発生的な団体が制度化されていくことで秩序が生まれるというかたちですので、ちょっとイメージ

が違うと思います。高澤さんどうですか。

高澤：論文そのものをみてみますと、確かに団体的編成として論じている議論とエリアスの『文明化の過程』での議論とは完全に重なってくるわけではないと思います。時間という軸をおいて考えてみると、二宮さん自身は団体的編成の統治構造論の限界を誰よりも感じていて、それをいかにして突破していくかということを一方では考えていたのではないかなと思います。その時に出てくるのが権威という問題であって、王の儀礼という議論が出てくるわけです。ただ団体的な編成の鎖をつないでおく最後のパーツについては統治構造論では不問にされている。統治構造論はある種とてもよくできているのでモデルとして独り歩きしてしまっているのですが、あれは完成形ではなく、北原さんのおっしゃっていたようにある種二宮さんの中期以降の仕事の起点にあった仕事だと思うんです。その後絶対王政を団体的編成の鎖を繋げたもの以上の存在として理解していくに際して、「構造」という議論よりも宮廷社会の「図柄」という議論のほうが合致すると考えるようになった、こうではないかなとわたしは読んでいます。

成田：北原さんに伺ったところ「フランス絶対王政の政治構造」は1977年の大会報告ということですが、ここでの二宮さんの議論のたて方に、僕など近代日本研究をしているものはびっくりするわけですね。戦後歴史学では、明治政府を絶対主義としてとらえるわけです。そしてさまざまに明治政府の絶対政府論が出されていくわけですが、ここでは天皇制絶対主義で、つまり上からひたすらに押さえつける、そういう発想なわけですね。つまり下から支えるという発想はまったくない、というところに明治政府の、日本の絶対主義の特徴をみていく、そういう発想であるわけです。ですから二宮さんの場合のように、絶対王政を考えていく上で中間団体を想定していくという過程でも、この中間団体は身分制の段階での話だということでは単純化できないということは重々承知ではありますが、日本研究においては発想としては上から押さえつけることによって秩序がつくられていくという、そういう発想をするわけです。

一方で二宮さんの場合において秩序は、上向法と下向法を使いながら、自発的な中間団体が絶対主義を支える役割を担っていくような、そういう循環構造で考えていく中で育まれていくものであるわけです。秩序ということばは、たびたび引き合いに出します民衆史研究においては重要なキーワードなんですね。鹿野政直さんに『資本主義形成期の秩序意識』という仕事がありますが、ここで秩序はどういうものとして考えられているかという、たとえば民衆的世界の秩序、といったように階層割りをされている。その際階層間では相互関連がないのですけれども、二宮さんの場合には、秩序という概念を使いながら循環的、かつ構造の問題にしようとする発想の中でとらえている。そういう点でとてもびっくりさせられる論文だったんです。

高澤：岸本さんも二宮さんの統治構造論からインスパイアされたとおっしゃっていましたが、どうですか。

岸本：いま成田さんがおっしゃったことはそのとおりだと思います。ただ日本史でいえば近世を研究していらっしゃる吉田伸之さんらは二宮さんの統治構造論を引いていらっしゃる。近世でも役に立つみたいですよ（会場笑い）。

高澤：逆にいえば近代の場合では役に立ちませんか。

成田：おそらく今岸本さんが指摘されたことは、身分制のもとにおける中間団体のあり様という発想だと思うんです。近代においても中間団体はできるわけですがけれども身分制が崩壊しているから新たなかたちになっている。そこでこそ二宮さんの発想にインスパイアされるはずなのですがけれども、なかなかうまくいかなかった。近世の場合は身分制度ということどううまくいったのかなあ、と思っています。

高澤：ありがとうございます。北原さんがご指摘になった権力論の問題、代表制の問題についてですが、たとえば身分制の中での中間団体がフラン

ス革命を経ていかなる変貌をとげたかという問題については二宮史学の中では十分に展開されていなくて、残された議論としてあるのではないかと、というご指摘だったのですけれども、これについては革命以降のことですので、松浦さんどうでしょうか。

松浦義弘：成蹊大学の松浦です。革命をやっている者としてどういうふうにこの問題を考えたらいいか、あるいは二宮さんはこの問題をどういうものとして考えようとしていたのかということについてですが、ある時「フランス絶対王政の統治構造」におけるあの図をみた際、ちょうど岸本さんがおっしゃっていたようなことを感じました。二宮さん自身は1930～40年代のフランスのコルボラティストからヒントを得たといっていたようなのですが、僕自身はフランス革命の史料を読んでいたら、革命家たちの議論の中に、彼らが二宮さんが提示したようなイメージでアンシャン・レジームをとらえていることが読みとれる史料にぶつかりました。そのときの僕の個人的な解釈としては、あの図は当時の人々の共同主観性、つまり現実の人々の世界イメージ、あるいはアンシャン・レジームに関するイメージにぴったり合ったものであるというように感じたんですね。で、革命家たちは、アンシャン・レジームのイメージそのものを否定することによって新しい社会、国家をつくっていかうとする。そしてイメージの一切の否定は、革命初期のル・シャプリエ法というかたちで実現されたわけです。絶対王政は社団の集合として組み立てられているので、そのような国家、社会のあり方を否定するという点でル・シャプリエ法の意味はあったわけです。そういうふうに革命家は考えていましたから、革命期の間は少なくとも、中間団体が作れない。そもそも政治家も政治家の集団としての党をつくることができない。ジャコバン派とかジロンド派とか言われますけれども、あれは現在われわれがイメージしている政党とは違って拘束力がまったくないわけです。フランスの場合ではル・シャプリエ法がずっと機能していて、確か第三共和政期まで機能していたと思いますが、その間のフランスの社会のあり方、特に中間団体について考えると、表面的には少な

くとも中間団体をつくることが禁止されている。したがって労働者と資本家との間の団体交渉は成立しないわけで、それに代わる制度として労働者の利益をまもるために労働審判所のようなものができて、それが間にはいることで労働者と資本家の間の利害を調整するというかたちになっていたわけです。

高澤：ありがとうございます。北原さんがコメントで「歴史家は問いを発する存在だ」ということを考えることは二宮史学を考える、あるいは歴史家のオペレーションを考える上で非常に大事だとおっしゃっていたんですが、その歴史家を支えるパトスのありかについても踏み込んでご提示をいただいたと思うんですね。それでその問いを発する歴史家個々人の営みを今度は一つの史学史として、つまり個人のエゴ・ヒストリーであると同時にある社会史として問題を立てる場合に、何をどういうふうにつかんでいけば史学史を論ずることになるのだろうか、現在の私たちが立っている視点をずらし返すような史学史になる議論になるのだろうか、そういう問題にもつながっていくように思います。この点について北原さんからのコメントを受けて、それぞれお考えのところがございましたら一言ずついただいた上で、フロアからもその点について伺うことで少し議論を開いていきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

長谷川：先ほど成田さんの報告の終わりの方で、言語論的な転回が歴史家の共同体を崩壊させたというような議論がありました。確かに言語論的転回が歴史学にもたらした影響は、「何でもあり」つまり相対主義というかたちで歴史家の叙述が何でも許されてしまうかのようなメッセージが含まれていたかと思います。ところがメタヒストリーをよく吟味して論じていきますと、実はメタヒストリーを突き詰めていくことには歴史家の立ち位置を非常に明確にとらえるというようなメッセージがあるのではないかと、言語論的転回は「何でもあり」だけではなくて、ある程度の制約を同時に設けているのではないかと。つまり史学史を十分に認識して、自分の立ち位置を明確化して、それにどう働きかけていくか、そういうようなメッセー

ジを持っていたと思いますので、言語論的転回が共同体を崩壊させたという側面もあると同時に、今回このようなかたちで史学史に関心を持つ多くの聴衆が集まるといったような共同性を再構築していく、そういう側面もあるのではないかと思います。

岸本：立ち位置の話ですけれども、そういう話は言語論的転回以前にはなかったのかという話で（会場笑い）、遅塚先生がおっしゃっているように日本の歴史学者は免疫ができていて、大学の史学概論の時に E・H・カーやウェーバーやマルクスを習ったこともあって、基本的に実践で役に立つぐらいはそのあたりの理論的な洗礼を受けているかな、という感じはするんです。二宮さんの「歴史の作法」ですけれども、あの中で E・H・カーが何度も引かれていますよね。ただ二宮さんが E・H・カーをもっとおし進めて議論を進めているかと言いますと必ずしもそうではないんじゃないかと思うのです。わりかし穏当なところで話がまとまっている印象があるので、そのあたりをどう考えていらっしゃるのかを分かる方にお聞きしたいなと思います。

成田：お二人が出された問題はとても重要な問題で、いまの歴史学をどう考えるかというところの根幹に触れる問題だろうと思います。

まず歴史家の共同体が崩壊したというのは、小田中直樹さんが訳されたノワリエルの著作の中の文言だったのでしょうか・・・他ならぬ 68 年世代の歴史家が、言語論的転回が歴史家の共同体を壊した、という指摘をしているわけですね。ただ、問題はかなりねじれてくる。68 年は大きな画期であるといい、68 年によって現代歴史学になったと主張する当の 68 年世代が、歴史学の擁護を口にし出す、そのことをどう考えるのか、というレベルの問題があると思います。

二つ目の問題としては、長谷川さんがおっしゃるように『メタヒストリー』は確かにある制約を持つことができている、つまり 19 世紀における歴史の語りに対して 4 つのモードを当てているわけです。ここで語りのモードは 4 つなんだ、という読み方をすれば、長谷川さんがいうように何かし

らの制約を受けている、というようになるでしょう。ただ、ホワイトの場合には19世紀の歴史を扱っているわけで、それではさて20世紀を扱う時に、歴史の語りをホワイトのというような4つのタイプでとらえていいのだろうか、新しいタイプがあるのではないか、という考え方もある。翻訳者として翻訳に携わっている岩崎稔さんはそれは循環するんだとおっしゃっていますから、長谷川さんの立場に近いだろうと思うのですが、やはりそのあたりは議論として積みのこされているだろうと思います。

三つ目は、岸本さんの問いに関わるわけですが、史学史について言うならば言語論的転回を持ち出さなくてもいま議論されているような問題はすでに出てきているのではないかという問いに対して、半ばその通りであるけれども、一方で新たな局面もあると言わなければならないだろうというのが僕自身の考え方です。史学史はこの10年、あるいは15年ぐらいで大きく意味を変えているだろうと思うんですね。史学史はそれまで半ば研究史の延長であるとともに、現在の歴史学のアイデンティティを確かめるために書かれてきた。ただここ15年ほどはむしろ歴史学とは何かという問いを出す場として史学史が議論されるようになっていく。だから、僕の言い方でいうと「方法としての史学史」というようなかたちになってきていて、史学史がほかならぬメタヒストリーになってきている、という状況がこここの状況ではなかろうか。そういう中で、認識と記述の問題が併せて問われてきているということではなかろうかと思います。

四つ目としては、岸本さんの報告がほかならぬ史学史であるということに関わるのですが、岸本さんは人称の問題を論じられて、二宮さんの一人称の問題を考えられた。岸本さんは二宮さんの一人称が多様であることを指摘されたわけですが、一人称に着目するということは他ならぬ歴史家の次元の事柄を問題にするということであって、戦後歴史学が「われわれ」という時の問題とは全然次元を異にしているわけです。「わたし」の立ち位置を問題にしているという、そういう議論を二宮さんの問題から読みとられたわけで、その時の人称を「わたくし」とするか「僕」とするか

「筆者」とするかといったレベルまで立ち入った議論をされたように思うんですね。このことは歴史家個人の次元を問題化するということが、歴史学の中で明示化しなければならない問題として出てきている、ということの指摘であるだろうと思います。こういうような問題あるいは問題群がはたして歴史家というアイデンティティを持っている人たちの共鳴板になりえるだろうか、ということが二宮さんが「歴史の作法」で描いた危惧であり、だけれども敢えてそこに期待をかけるというのが二宮さんのやり方であったと思います。ですから二宮さんは「歴史の作法」でこの問題を出すことで敢えてその共鳴板をつくろうとしたわけで、岸本さんがそれに共鳴された、という点で今日のこの場は画期的な場であったというように思うのですけれども、そのことはしかし、じゃあ歴史家とはだれか、という厄介な問題を出しているように思います。史学史を書くときに、松本清張や司馬遼太郎という存在を歴史家として考えていいのかという問題がある。これは二宮さんが出された、歴史固有のナラティブはなにか、という問題とも関連してくる。そういう次元に問題が引きずり出されているというふうに思います。

高澤：問題を次のステップへとつなげていただきありがとうございました。ここでの歴史家とはだれかということについてですが、プラクティカルな歴史家と限定してしまっているのでしょうか。

成田：プラクティカルな、といった時にはある実体が想定されていると思うんですね。そういう実体化をしないで歴史家を考えることがここでの必要な議論だろうと思います。あるいはナラティブ一般ではなく歴史の固有のナラティブがある、ということを考えるかどうかということだと思います。

高澤：この歴史の固有のナラティブがあるのかという問題と、もう一つ、二宮さんはシャルチエは高く評価するがシャルチエには感銘を受けない、むしろナタリー・ゼーモン・デーヴィスやカルロ・ギンズブルグに心動かされると述べていて「歴史の作法」のなかでも矜持と責任ということばと同

時に歴史の「美しさ」について語っているのですが、これらの問題と合わせてわたしたちはどのように考えかつ語り、記述していくのかといった問題があるだろうと思いますけれども、どうでしょうか。……少し問題を広げすぎましたので固有のナラティブというところに問題を縮小致しまして、歴史に固有のナラティブについて長谷川流現代歴史学からすれば、どのようなものになりますでしょうか。

成田：重ねて長谷川さんに聞こうと思ひましてマイクをとりました。高澤さんが縮小した問題ですが、長谷川さんは歴史家の仕事の形態としてどのようなものを想定されているのか、ということです。とりあえず今日は歴史叙述、歴史の方法論、歴史学の状況論と分けて話をしますけれども、長谷川さんは最終形態をどのようなかたちで考えるのか、また二宮さんの『マルク・ブロックを読む』のような仕事は歴史叙述、歴史の方法論、歴史学の状況論のどれに属するのか、あわせてお伺いできればと思います。

長谷川：問題が難しくて私の手に負えないところがあると思いますが、歴史状況や特定のオーディエンスを意識した上での歴史叙述の例をイギリス史の中で発見するならば、時代と共鳴しながら強い影響力を持ってきたのはE・P・トムスの『イングランド労働者階級の形成』だろうと思います。戦後の福祉国家の中で労働者は政治的なアパシーに陥っているという状況の中で、そのアパシーからいかなる主体を立ち上げるかというかたちで問題意識を構成し、具体的な労働者、民衆の姿を復元して、その内容を労働者たちに語りかけるといったかたちである本は書かれていたわけですが、時代状況、語り口、オーディエンスがセットになったかたちで典型的な事例を提供しているのではないかと思います。その後のイギリス史学のフランスや日本の歴史学との若干の違いとしては、イギリスではヒストリー・ワークショップ運動というものがあまして、これが市民社会レベルでの歴史の発掘、叙述に結びついている。ここでみられる歴史叙述は日本やフランスでみられる歴史叙述とは若干異なる形態のもので、常に一般

民衆、労働者、あるいは一般市民を念頭に置きながら歴史叙述が語られる。このようにイギリスでは「民衆史」が今日でも一つの伝統を形成しているという一面があつて、これが日本、フランスと違うところかなと思います。

高澤：安村（直己）さんからの質問で、いまを生きる歴史研究者の歩むべき道を考えるとき、ステッドマン・ジョーンズの唱えるような権威の回復と、二宮さんの言う相互討議の場としての歴史叙述の間にはどのような関係があるかと考えるか、という大きな問題が出ていますが、あわせてこの質問に回答していただけますでしょうか。

（安村直己氏の質問）

二宮さんの問題意識を受けていまを生きる歴史研究者の歩むべき道を考えるとき、ステッドマン・ジョーンズの唱えるような権威の回復と、二宮さんのいう相互討議の場としての歴史叙述の間にはどのような関係があるかと考えるか。

長谷川：いまの発言の中にも若干答えが準備されていたかと思いますけれども、とりわけイギリスの歴史学は、サッチャーイズムというかたちで1980年代に新自由主義が席卷する中、サッチャーが「ビクトリア的な価値観に帰れ」というスローガンを掲げて新自由主義的なイデオロギーを強く煽っていったわけですが、その際歴史家たちはビクトリア朝の実態そのものを問題にすることで論争の先頭に立ちながらサッチャーイズムとの対立を鮮明にしていたわけで、結果としてサッチャーとは違う歴史認識を広めることになったわけです。それはなぜかといえ、イギリスの場合は歴史学というものがある程度今日でも権威をもっている、つまり人々の問題関心、あるいは広くいえば政治的関心にこたえるかたちで歴史が機能しているということがあるのではないかと思います。イギリスの歴史学は伝統的に労働者教育と結びついたかたちで育まれてきたわけで、そのような長い伝統をもっていることが相互討議の場を保証していたのではないかとと思うのですが、この点の一つの参考になるのではないかと考えています。

高澤：先ほど史学史の問題として少し一般化して申し上げた問題とも重なってくるのですけれども、近藤（和彦）さんから、二宮史学を同時代の日本の人文学の大きな波の中で考察するべきではないかというコメントが出ておりますので、補足されることがありましたらお願いします。

（近藤和彦氏のコメント）

1. 生き生きして「脇の甘さ」や「筆のすべり」のない文章であることは事実ですが、そこにこそ高橋―柴田―二宮―遅塚の影響関係、交友、相互参照の所産をみるべきでしょう。二宮史学をただ単独の人格の営みとみるとしたら誤りです。同時代のフランス、同時代の日本の人文学の大きな波の中で考察すべきでしょう。

（1932年生まれ。コミンテルン32年テーゼ、『日本資本主義発達史講座』、三木『歴史哲学』世代の宿命）

2. 二宮賞揚の会で終わっていいのか。

高橋史学のかんづけと二宮史学のかんづけのアナロジー。

近藤和彦：立正大学で教えております近藤和彦です。今日の話の中で一番面白かったのは岸本さんの文体論、スタイリスト二宮という表現でした。おっしゃるとおり生き生きと勢いがある「脇が甘く」なく「筆のすべり」もない文章を書かれる方だと思います。二宮さん一人をみるのではなくて、やはり高橋幸八郎、柴田三千雄、二宮宏之、遅塚忠躬という四人の間の関係として考えないと何も明らかにならないような気がします。先ほどの社団的編成を考える上でフランス革命はどうとらえるのかという議論についてですが、やはり二宮さんが提示した絶対王政の統治構造論をそのまま受けて、柴田三千雄さんが社団的国家、名望家国家、国民国家という三つの図式で16世紀から19世紀の終わりまでのフランスを中心とするヨーロッパの社会がどのようになっているかという議論を組み立ててみせたわけですから、それとの関係で論じなくちゃいけないような気がします。そしてフランス革命というのはそれまでの社団的編成を壊すまさしく革命であって、その後の19世紀のフランス社会ないし欧米社会と18世紀までの欧米社会における社会的編成あるいは「図

柄」が根本的に違うということは、例えば遅塚先生などがなんどもなんどもおっしゃっていたことだと思いますし、そのあたりも指摘していかなくちゃいけないような気がします。それで高橋幸八郎と二宮さんの文体は全然違うという指摘がありましたが、とはいえ二宮さんは高橋さんのことを敬愛していたわけですし、さらに1950年代からの高橋幸八郎はいつてしまえば化石ですから、彼が生命力を維持するためには二宮宏之や遅塚忠躬らしき人がみつつかない、愛して愛して絞め殺すような、そういうところがあったような気がします。敢えてそういう言い方をさせてください。とはいえ柴田三千雄さんは1960年をこえると高橋史学から自立します。先ほど68年のインパクトが話題に出ましたが、実は1960年も日本の歴史家にとってかなり大きなインパクトだったような気がします。1960年の安保闘争の後、二宮さんがかなり感傷的なモノローグを東大西洋史の内部で刊行しているガリ版刷りの雑誌である『西洋史通信』に書いておられるわけですが、つまり60年の安保闘争に遭遇した日本の進歩的な知識人たちはその出来事の結果との対話を繰り返して60年代を生きてきたわけで、そうしたところに68年の出来事が一種の断絶と連続のもとにあらわれてくるわけですから、68年が最初の経験であるというわたしたちとは違ったと思います。柴田さんの場合は高橋史学の土地制度史の観点からフランス革命をみるということからはじめて、60年をすぎてジャコバン主義とサン＝キュロット運動との交錯からフランス革命をみるようになったわけで、かなり早々と自立されているわけです。一方で二宮さんの場合はフランス留学を経て73年の『印紙税一揆』覚え書き」が一つの画期になったのかもしれませんが。遅塚さんの場合はさらに遅れて70年代の終わりの「フランス革命の世界史的位置」や『ロベスピエールとドリヴィエ』が画期になったと思いますけれども、いずれにしても三人の間の刎頸の交わりのようなものがあるわけで、その分業関係＝協業関係を明示的に考えながらでないと二宮史学というものをきちんと位置付けられないんじゃないかなというのが、わたしの言いたいことの一つです。

もう一つはそもそも今日のこの会合が何のため

に開かれているのかということで、疑問を呈したいと思います。つまり、二宮さんとの魅力的な経験をお持ちの方はたくさんいると思いますし、わたしもそうですが、ただそれをなんども反芻するだけで歴史学の将来があるのか、ということです。先ほど言いましたように高橋史学が二宮、遅塚を呪縛していたという事実があるわけで、高橋さんよりさらに魅力的で立派な仕事をなさっている二宮さんに呪縛されてわれわれ自身のこれからの新しい研究がもし阻害されることがあれば、それはとてもまずいだろうし、二宮さんは天上からみて残念がるに違いない、と思います。あまり時間がないのでいくつかの引用だけにします。1950年代に起こったドップとスウィージーの論争にたいしてジョルジュ・ルフェーヴルがこういっています。「論争に加わっている人たちは他の歴史家の研究成果を借用して仮説を立てている。これはこれでいい。しかし歴史家は仮説にのみ満足するわけにいかない。仮説には仮説でこたえるのではなくその外部に出てきて論証しなくてはならない。これ以上抽象の中で論争を続けることは無益であるばかりか危険なことですらある」とありまして「ドップとスウィージーは問題を定式化するという貢献を行ってくれた。さあ、いまは歴史家の領域で仕事をしよう」と。そういう姿勢でいないとわたしたちの場合にはとても困ったことになるんじゃないか、と思っております。もう一つこれは二宮さん自身のことばで、彼が『パードレ・パドロネ』について書いた1982年の文章から引用しますが、パードレすなわち父にして同時にパドロネ（支配者）である父親と自らの新たなアイデンティティを築こうとしている息子との関係、それぞれが体现している文化の相克をこの文で論じた上で二宮さんは、「ここに示されている主題の重さを背負うのでない限り、民衆文化の研究なるものは、観念的な絵空事か、好事家のひまつぶしに終わってしまう」というように書かれています。二宮さんってあんまり激した書き方はなさらないと思いますが、ここではかなり強い文言ですよ。どうして父と子との関係についてこんなに強い書き方をなさるのだろうと考えていたのですけれども、1982年は高橋さんがなくなった年ですよ。そのこともどこか彼の意識の中にあってこういう文に

なったのかな、と思います。やはり社会史あるいは文化史について書いている時の彼の頭の中には自分の先生との連続性と断絶のようなものも含意されていたのではないか、ということです。

高澤：いま近藤さんが提示された問題は、意図と違うと言われるかもしれませんが、史学史を書くというときに、ここに五巻のテキスト群が刊行されたことが、二宮さんを直接に知らなくともここにいらしている方がこの先問題を広げていく大きな柱になるということじゃないかと、そうわたしは受け止めました。その時一人の歴史家として書くけれども同時に社会的存在として規定されているわけで、そのことも身を持ってある種のテキストから読んでいくことができるように思うんですね。一見社会的に規定されている「わたし」「僕」という一人の人間存在だけをとりだして光を当てているようなのだけれども、その際にはそのむこうにある世界との関係性のなかで読み解いていかななくてはならないでしょうし、今回はこういう構えになりましたけれども、当然フランス革命との問題や、西洋近代史をどう考えるかといった問題の場合はとりわけ数人の関係性の中で読み解いていかなければならない、というご指摘だと思いますし、史学史というものを読んでいく、方法として鍛え上げていく際のご提言だろうとわたしは受け取りました。

もう一つ、呪縛、ということですが、これは受け取る人によってそれぞれ違うかもしれません。わたしが少なくとも受け取った二宮史学のエッセンスとは何かというと、問いを向こうへ投げかけ続ける、ということです。いまわたしたちはどこに立っていて、それをどう明日に向かって問いを投げかけるか、ということですから、そういう意味ではテキストに対してさまざまな問いを投げかけつつ、さまざまな世代の歴史家がそこから何をくみとりつつ、という読みをしていければ、と、個人的ではありますが、わたしはそう思っています。ある意味立派な先生でいらしたことは間違いないですけれども、いつもわたしが思うのは、二宮さんになくてわたしにあることは二つあると思うんです。一つは命です。もう一つは若い人、学生を相手にしているということです。ある

種この二つに立ってやっていくしかないと思っていますので、そういうかたちの対話をしていければと思います。成田さんが書いていたことですが、二宮さんは歴史家が出会い論じあう開かれた一つの場が確保されることはきわめて大事だ、相互交流の場がきわめて大事だとおっしゃっていました。本日はお忙しい中たくさんの多種多様な専門分野を持つ方にお集まりいただき、ありがとうございました。先ほどから歴史家の共同性はなくなったのだろうかという問いかけがありますが、分かりません。分かりませんけれども、個人個人の持っているある種の閉塞感、自分の論文を書いている、あるいは博士論文を書かなければならないという中で、本当に必要な対話ができないという状況がある、そういう状況があるからこれだけの方に来場していただくことができた。その意味で大きな遺産だなというふうに思っております。最後に、コーディネーターの一人である林田さんからひとことお願いできますでしょうか。

林田伸一：最後にひとことご挨拶申し上げます。林田でございます。今日は1時から5時半過ぎまで熱のこもった報告、そして議論をいただきましてありがとうございました。壇上の方々はもちろん、参加していただいた方にお礼を申し上げます。特に、若い方に多く来ていただきまして、このシンポジウムの企画をしている段階から若い方がたくさん来てくれるといいねと言っておりましたので、それは大変嬉しいことでございました。このシンポジウムは著作集の完結をきっかけとして企画されたわけですが、刊行元である岩波書店にもいろいろとご助力をいただきました。その際に興味深い話を伺いまして、この種の著作集というのは最初の段階をすぎるとあまり売れなくなるのが普通なのだそうです。『二宮宏之著作集』の場合は(2011年)12月に完結をいたしましたけれども、その後もじわじわと売れているようで、これは異例なことのようです。これはよく分かりませんが、どうも二宮先生の仕事の質と関係があるのではないかなと思っています。ただまだ残部があるそうですので(会場笑い)、どうぞ勤務先の図書館などにまだ入っていない方は入れていただければと思います。この会は、日仏歴史

学会と海外事情研究所の主催で行いました。それではこれで閉会と致します。ありがとうございました。